

# COTO TSLUSHIN

発行 / 滋賀医科大学同窓会湖医会  
〒520-2192 大津市瀬田月輪町 滋賀医科大学内  
TEL 077-548-2074, FAX 077-548-2094  
E-mail:koikai@koikai.org  
http://www.koikai.org/

湖都通信 47号

Since 1987, Editor Takehiro Inui,  
Co-editor Takashi Kadowaki,  
Tetsunobu Yamane  
印刷 / 昌栄印刷 2005.3.1

## 滋賀医科大学開学30周年

—— 記念事業に多くの会員が参加 ——

春の兆しが、キャンパスのあちこちに見受けられる今日この頃、会員のみなさまいかがお過ごしですか？

母校の滋賀医科大学は国立大学法人への移行とともに昨年10月1日開学30周年を迎えました。10月1日には記念国際シンポジウム、翌2日には記念講演会・記念式典が、大津プリンスホテルで盛大に挙行されました。国際シンポジウムでは、交流協定を結んでいる海外の5大学の学長らが活発な意見交換をしました。

また記念式典には県内外から多数の出席者があり、式典終了後の記念祝典では、「湖医会」を代表して中島副会長が祝辞を述べました。(3頁に内容掲載)

30周年記念事業としては他に、『開学三十周年記念誌』が2004年10月1日に発行され、さらに『開学三十周年記念奨学基金』も計画されています。また2004年7月から2005年2月にかけて5つの市民公開講座が開かれました。特に本年2月16日に学内にて開催された『開学30周年記念シンポジウム』では、卒業生を含む滋賀医大の研究を支える教員による熱心な講演がなされました。



江口 豊氏、

滋賀医科大学教授に！

2004年10月1日付けで、救急集中治療医学講座教授に、医学科2期生の江口豊氏が就任されました。卒業生による滋賀医科大学教授は三人目。

た。

わが湖医会でも一昨年の湖医会奨学金制度に加えて、新たに「藤原よしみ奨学金」がスタートします。また、長年の懸案事項であった「保育施設の設定」についても、大学・滋賀医大生協にも呼びかけ三者で協議しながら来年度開設に向けて活動が具体化されることになりました。さらに、会員向けさまざまな情報をスピーディかつタイムリーに提供できるよう、会員のメーリングリストを立ち上げるべく準備中です。一人でも多くの参加を得て、会員に役立つメーリングリストにしたいと思っています。(詳細は別紙にて)

### 次期学長に、吉川現学長

現学長の任期満了にともなう次期学長選出にあたり、学長選考会議(大久保岩男議長)は、去る2004年12月21日、学長候補者選考の参考とするために、意向聴取投票を実施しました。選考規程に定められた投票有資格者443人中325(うち白票6)人が投票しました。候補者は2人で、吉川現学長と産婦人科の野田教授でした。

投票結果は、野田教授188票、吉川現学長131票と言った結果でした。学長選考会議は、意向聴取投票の結果も参考にし、選考の議論を重ねた結果、第1期の中期目標・計画を着実に達成すべきことが重要な課題であると受け止め、さらには現学長と執行部が中期目標・計画や附属病院の再開発などの進捗状況をよりよく把握していると考えられ、その実現のためには、大多数の意見として吉川候補を最終学長候補にするのがよいと結論に達した。としていきます。

### 主な記事

しゃくなげ会教養学習会でお話して..... 2  
滋賀医大開学30周年に寄せて..... 3  
同期会 / 医4期生・14期生..... 4 ~ 5

留学私話..... 6  
議事録 / 保健師会に参加して..... 7  
LITTLE WINDOW..... 8

# しゃくなげ会教養学習会でお話しして



近江温泉病院 荻田 謙治 医、17期生)

しゃくなげ会員の皆さんに語りかける



台風による激しい暴風雨の中  
多くの出席者がありました

去る2004年10月20日、滋賀医科大学において、しゃくなげ会の会員の皆様の前でお話しさせていただく機会があった。毎年、解剖体慰霊式がこの時期に行われるのだが、その日の午後に、会員の皆様を対象とした教養学習会(講演)の講師として私が招かれたのである。10月20日といえば、全国的に大きな被害をもたらしたあの台風23号が滋賀県の真上を通った日。暴風雨の中での行き帰りも大変だったが、今回、このような機会を得られたことは、私にとって貴重な経験となった。

この教養学習会の件を、学生課の成宮さんから伺ったのは、その2ヶ月ほど前のことだったと思う。「学生時代に実際に解剖実習を行った滋賀医大卒の人に毎年お願いしている」とのことだった。また、学術的な話ではなく、学生時代の思い出や体験談のような話でよいとのことだったので、引き受けさせていただいた。後日、しゃくなげ会常務理事の熊澤さんとお会いしたとき、「私たちが会員はただ時期がずれただけで、もしかしたら先生に解剖してもらっていたかもしれない。だから、卒業生の先生方と私たちとはつながりがある」と強くおっしゃっていた。だからこそ、滋賀医大卒の先生方のお話しが聞きたいとのことだった。

私が解剖実習を受けたのは今から11年以上も前のことになるが、解剖実習を通

して学んだことは計り知れない。解剖の知識のみならず、とりわけ人の命の尊さや医師として必要な"心"を学ばせていただいたからだ。実はその解剖実習を終えた後の夏に、ラグビー部に所属していた私はその練習中に頸髄を損傷し四肢麻痺という障害を負った。学生時代の思い出といえば、やはり私の場合は"障害を持ったこと"が一番に挙げられる。そのため、今回の講演は、「障害とともに歩んだ11年~悩みの数だけ喜びがあった~」という演題で、解剖実習の思い出をはじめ、ラグビーでけがをしたことや、その後、障害を持ちながらどのように学生生活を送り、どのように仕事をしているのかということを中心に話をさせていただいた。会場は、A講義室。私が教室の後ろからそっと入ると、まだ総会が行われていた。この教室に入ったのは、実に何年ぶりだろうか。ちょうど私がけがをした後、最初に復学した教室が、このA講義室だった。私は教室に入った瞬間、11年前の自分に戻っていた。

頸髄損傷を負ったのは、3年生の9月の出来事。体に四肢麻痺が残ることを知り、それでも医師を目指すことを心に誓い、復学したのがその年の9月であるから、教室に戻ってきたといっても、まだ2ヶ月ほどしかたっていない。ただ、急性期を過ぎて体の状態が落ち着いてきたとはいえ、まだ心も体も不安定な時期だった。車いすに乗り、友達に押されて教室へ入った。すると、よく知っているはずの教室が、まるで別世界のように感じた。何か空気が違った。

私自身も回りの友達も、車いすで復学することに対し、戸惑いと不安があったからであろう。緊張感といってもいい。これからどうなるのであろうか。その時は"希望"という言葉はなかった。この教室に11年ぶりに入った私は、11年前の"緊張感"とよく似た感じを受けた。ただ、あの時のような戸惑いと不安はなかった。この11年間、多くの人に支えられ、私の心から不安を少しずつ取り去っていただいたからだ。代わりに、やさしさと心遣いをいっぱいいただいた。だから今の私は、仕事のできる喜びと多くの人への感謝の気持ちでいっぱいである。

今回の教養学習会を通して、改めて、今日の医学教育はしゃくなげ会の皆様のように多くの方々のご厚意の上に成り立っていることを再確認することができた。そして、しゃくなげ会常務理事の熊澤さんもおっしゃっていたが、私も医療を通して、これからも人と人との心のつながりを大切にしていきたいと強く感じた。帰路の空模様は、台風直下の暴風雨だったが、心は晴れていた。

# 開学30周年のお祝いに寄せて

— 2004年10月2日に行われた滋賀医大開学30周年記念祝典での挨拶の内容を掲載します —



湖医会副会長 中島滋美（医、2期生）

湖医会が大学に還元できることは、単に寄付という経済的なものだけでなく  
人材の面でも、もっとできるものがあると思います

渡辺会長が出席できないため、副会長の私、2期生の中島が代わりにご挨拶させていただきます。

この度、滋賀医科大学が開学30周年を迎えましたことは、卒業生であります湖医会会員にとりまして、たいへん嬉しいことでございます。今まで多くの方々にご指導・ご支援をいただきましたことに、湖医会を代表して心より感謝し、厚くお礼申し上げます。とくに滋賀医大創立と発展のためにご尽力くださいました文部科学省や滋賀県の関係者の皆様、近隣の大学の皆様、滋賀医大を受け入れ、さまざまなご支援をくださいました津江市や草津市・守山市の皆様、瀬田および大学周辺の地域の皆様、解剖実習に貴重なご献体をくださいましたしゃくなげ会の皆様、学生や研修医の教育にご協力くださいました患者様、先輩としてご指導くださいました滋賀県の医師会の皆様、学生や卒業生を温かくも厳しくご指導くださいました滋賀医大教職員の皆様、そしてその他多くの皆様に、心からお礼申し上げます。

私ども湖医会は、ただ今正会員2808名、準会員860名、特別会員391名の計4059名を擁するまでになりました。医学科出身正会員は滋賀医大に342名、滋賀県内の他の医療機関に545名在籍しています。そのほか、行政機関12名、母校以外の大学勤務307名で、母校以外で教授になっている者が6名います。246名は開業しています。また、看護学科出身者も475

名となり、うち滋賀県内に勤務が133名で、そのうち滋賀医大73名、他の医療機関23名、保健師26名、養護教諭5名となっており、それぞれ第一線で活躍しています。

さて、滋賀医大も創立30周年に独立行政法人化されました。一時は母校がなくなるのではないかと心配した卒業生もいたようですが、このように再出発できましたことは、湖医会としましてもたいへんうれしく思います。しかし、昨今の厳しい状況の中、大学を運営・維持していくのはとてもたいへんなことです。このような状況で、卒業生として何ができるのかと、常に問いかけながら湖医会は活動しています。湖医会は、従来大学が必要としている情報を提供したり、寄付をしたり、奨学金制度を整えたりすることなどで大学をサポートしてきました。今後はどのように母校を盛り上げていくのが、湖医会にとっても重要な課題です。

では、母校の発展のためにはどうしたらよいのか、誰がそれを担うのかということを考えてみますと、現在大学に在籍している人だけでなく、大学の外にいる卒業生にもいろいろな貢献ができると思います。卒業生がそれぞれの職場で活躍することは当然ですが、それを何らかの形で母校に還元するという流れが必要です。湖医会が大学に還元できることは、単に寄付という経済的なものだけでなく、人材の面でも、もっとできるものがあると思います。例えば、

学外で活躍している卒業生をもっと大学のポストにつけてもらうなど、考えてもいいのではないのでしょうか。あるいは共同研究や共同事業など、さまざまな形で卒業生の力を大学に向けることが可能です。大学は、卒業生をもっと利用してください。大学が卒業生を活用することで、大学への求心力は確実に高まります。大学と卒業生は、一体となって母校を発展させる原動力になっていけると信じています。

今回、創立30周年にあたり、われわれ湖医会は、益々母校の発展のために寄与していかなければならないと強く感じました。今後も母校の発展のため、皆様方の厚いご支援とご指導をお願いし、ご挨拶とさせていただきます。

どうもありがとうございました。

私の演説に対し、大学関係者からは同窓会からの注文と受け取られたような反応(反発?)が一部ありましたが、学外からの出席者の反応はとてもよかったです。とくに記念講演会で講演をされた東京大学名誉教授の渥美和彦先生からは、ものすごくよかったと言っていただき、何回も握手をしていただきました。ぜひ中央の偉い方々(文部科学省関係や政治家)に報告しますと言っていました。

また、経営協議会のメンバーであります立命館総長顧問の田中道七先生や滋賀県商工会議所女性連合会会長の西居咲子先生も、大学はもっと卒業生にポストを与えるべきだと言ってくださいました。

# 同期会

医学科  
卒業20年4期生



清風故人來たる

名誉教授

井戸庄三



大熱酷暑去り、清風故人來たる(唐杜牧、早秋詩)

酷暑が去り、爽やかな秋風が吹く9月25日の宵、久しぶりに50数名の旧友にお会いでき、たいへん懐かしく楽しいひと時を過ごさせていただきました。ありがとうございます。

入学願書の写真がスクリーンに大写し

され、出席者全員が一人ひとりで在学中の思い出やエピソードを語り、そして近況報告をするという趣向で、あっという間に時間が過ぎました。大学に残って研究に励んでいる人、開業医として地域に貢献している人、病院の勤務医として日夜がんばっている人、子育てと臨床医を両立させている人・・・いろんな分野でたくましく活躍されている様子、心強く、うれしく思いました。

卒後20年といえば、多くの方が40代半ばから後半でしょう。不惑は昔のこと、今はエネルギーで豊かな可能性を秘めた人々の転換期です。これまで歩んできた道にそのまま進むもよし、思い切って別の道に向かうもよし・・・しばし立ち止まって、充実した悔いのない人生後半の設計図を描いてほしいものです。

4期生の皆さんのご多幸といつそうのご活躍を願っております。

## 20年の歲月



国立循環器病センター  
研究所 バイオサイエンス部  
斯波真理子

「ひさしぶり」というひとことで、会わなかった10年、20年の歲月が吹き飛んでいってしまう感じがしました。2004年9月25日、琵琶湖ホテルで行われた、4期生の卒後20年の同期会でのことです。ひさしぶりと言っても、本当に20年ぶりの顔、10年ぶりの顔でも、つい最近まで一緒に勉強していたような錯覚にとらわれるほど、歳月の経過を感じませんでした。

同期会では、入学時の写真の映像の横で、ひとりひとり、近況を話しました。当



懐かしい面々とよみがえる日々

湖東記念病院 新谷 寛

2004年9月25日、滋賀医科大学医学部4期生の卒後20年同窓会が行われました。教養課程の時に世話になった井戸先生、金光先生もご参加いただきとても懐かしかったです。

時の写真と比べてみれば、それぞれ、大変な変化が感じられました。当時のご自分の写真を見ながら、これはどう見ても犯罪者の顔だと断じる精神科の先生、最近五男が誕生した産婦人科の先生など、みんな個性豊かに成長し、今では地域医療で、病院で、あるいは教育の場で、それぞれ活躍されているお話を聞き、それぞれの場で、頼られる存在になられていると感じました。

参加者ほとんどが2次会に突入、懐かしい話に花を咲かせました。卒業時、20年後はどうなっているのだろうかと考えても想像もできませんでしたが、過ぎてしまえばあつという間だったような気がします。私は卒業後、第3内科に入学し、大学院修了後は国立循環器病センター研究所で研究を続けさせていただいています。卒業時に抱いていた、研究を続けるという夢を実現しています。研究の成果に心踊る毎日です。10年後にはみんなどうなっているだろうとワクワクしながら帰途につきました。

追記：同期の井上邦夫氏が亡くなられました。同期会に元気で参加されていましたのに、信じられない気持ちです。ご冥福をお祈りいたします。

## 井上邦夫君を悼む

とみなり整形外科

富成伸育



2004年11月18日、井上邦夫君は突然不帰の客となっていました。

今私の前には一個の金メダルがある。1980年8月1日、米子で行われた第32回西日本医科学生総合体育大会漕艇部門シエル4優勝メダルである。これは、井上・老子・佐藤・沼先輩と私で勝ち取った学生時代の勳章だ。あれから24年目にして突然の悲しい別れになるとは、今も信じられない思いである。

初めて井上君に会った日のことは忘れな

い。ポー

ろは多々ありますが、みんな卒業当時の懐かしい面影を残していました。談笑しているうちにますます思い出の日々がよみがえり、卒業記念パーティーにでもタイムスリップしたかのようでした。大学に残って頑張っている方、子育てしながら仕事をしてお母さん方それに開業して孤軍奮闘している方、それぞれの人生展開を垣間見て、みなさん翌日から始まる現実に立ち向かうエネルギーをもらったことと思います。これからもインターネットなどでお互い情報交換ができ、また仕事以外でもおつき合いできることを願って止みません。次回何年後になるかわかりませんが、また、みんなの元気な笑顔が見られることを楽しみにしています。

入部員が集まった時彼一人だけがとても垢抜けておりそれが私にはとても眩しかった。陽気でありながらもクールな彼の性格がボートのリーダーとしてびたり当てはまった。沈着冷静に正確なヒッチを刻む正調井上。そのうしろ3番に座る私は、彼と動きを一つにすべく井上の背中に神経を集中させながら漕ぎ続けた。残念なことには優勝の翌年井上君は体調を崩し対抗クルを降ろることにしたが、その後モーターに対する情熱は変わりないものであった。

卒後は東京へ戻り慶応大学整形外科教室に入学したが、滋賀医大ポー卜部OBとしていつも学生の面倒をよくみてくれた。2005年地元岐阜で開催される世界ポー卜選手権には是非観戦に来てくれと先日話をしていたばかりなのに、それも叶わぬこととなってしまった。今はただ彼の冥福を祈るばかりである。

# あつという間の10年の重み

滋賀医科大学福祉保健医学講座  
ヒツパীগ大学公衆衛生大学院疫学部

門脇 崇



2004年9月11日夕刻、あつという間に10年前にタイムスリップしたような感覚でした。次々と集まってくる人たちは卒業した頃と見かけはほとんど変わらず、過ぎた時間が嘘のようでした。同期会恒例の入試の時の受験票の写真的スライドをバックに近況スピーチをするコーナーでは、各々の卒業の足跡、現在の活躍ぶり、奥様連れやお子様連れで幸せそうな姿に触れ、ようやく10年間の時間が経過したことを実感したのでした。また、ほとんどの方たちが2次会まで残り、思いついた花を咲かせる一方で、現在の医療のあり方や将来の夢を語り合う場面もあり、日付が変わっても話が尽きないものでした。

## 医学科 卒業10年

# 14期生



1994年に母校を卒業して早くも10年余り。病院にいても大学や研究機関にいても、既に最先端の中堅どころで多忙な時期でもあります。また、そろそろ開業する人や子育てが大切な時期の人もいるでしょう。卒業前に同期の互選で同窓会幹事を仰せつかった身としては、その責任を果たしてから出張したいと考え、例年は年明けに行われる同期会を9月に繰り上げることにしました。そのために参加できなかった皆さん、ごめんなさい。また、期間限定のメーリングリスト「SUM14」に参加して下さった皆さん、お楽しみ頂けましたでしょうか。次回は是非会場でお会いしましょう。

後日談・・・幹事の責任を果たしたことにさせて頂いて、心置きなく渡米して1ヶ月が過ぎた頃のこと。ニューヨークで開かれたAmerican Heart Associationの総会は参加者が3万人を超えるスケールで、学会とは思えない雑踏を足早に歩いていると、日本語で話しかけてくる人が。誰かと思えば10年前と姿は変わらない末松義弘君で、現在はハーバード大学の心臓血管外科で活躍しているとのこと。ポストンには他にも中村元君、前野恭宏君、荒木学君、久保滋人君、そして今や北海道大学助教授の西村川端采美さんとたくさんの同期がいて、同期会があった9月11日には偶然皆で集まっていたとのこと。共に学んだ仲間達が世界で活躍している姿を垣間見てまた嬉しくなるのでした。皆さんの益々のご活躍とご健康とご多幸を祈念する次第です。

### 10年後も笑顔で再会を



岐阜大学医学部  
麻酔科・疼痛制御学  
川島 晶子

卒業10年の同期会が9月11日にロイヤルオークホテルで開かれました。今年は例年より早い時期の開催、秋の学会シーズン前とあって28名と少ないように感じましたが、始まる前から10年ぶりとは思えないほどの盛り上がりで、楽しいひとときを過ごすことができました。私自身この10年の間に結婚・出産・退職を経験し自分の生き方に悩み、住み慣れた関西の地を離れて再びパート麻酔医として復帰しました。シーズン限定で立ち上げら

れたメーリングリストで皆の近況を知り懐かしい反面、出世した人・大学に残って研究活動している人・海外留学している人・第一線で働いている人など、私にとって眩しい人達ばかりで参加を決めるまでにいるいる考えてしまいました。当日JR琵琶湖線で京都から瀬田までの約20分間、外を眺めているうちに懐かしい思いが湧いてきて、石山を越えた辺りではボート部の艇庫を見ようと思わず乗り出してしまいました。駅を降りた頃には悩んでいた気持ちはすっかり消え去り、晴

### とてもいい刺激になりました！



まったこともあり、一人一人の近況紹介に勝手気ままなコメントでつつこんだり、懐かしい話の花が咲いて、とても楽しいひと時を過ごしました。

研究や臨床でみんなそれぞれ頑張っている中、開業した人、留学中の人、子育てに重点を置いている人など、たくさんの同期生の近況が聞けて、2人目の子供を妊娠中の私にとってもいい刺激になりました。独身の時や夫婦2人だけだった時と同じように働くことはもう不可能で、子供が増えることで生活がどんな風になるかわからないけれど、その時々に見える形を見つけて、形を変えながらもみんなと同じ医師として仕事を続けていきたいと強く思いました。

今回私は子供と主人をおいての宿泊つき参加のため、2次会も満喫し、一緒に泊まった友人と夜遅くまで語らい、十二分に同期会を楽しむことができました。(その夜は同期生がたくさん出てくる夢まで見ました!)今度の10年後の20周年の同期会には家族揃って参加したいなと思っています。

愛賢会 浜田病院 産婦人科

石河 顕子



9月11日にロイヤルオークホテルで開かれた卒業10周年の同期会に参加しました。卒業以来顔を会わせたことのない仲間たちと、会った瞬間にすぐに学生の頃の気分に戻り、話が弾んだのは不思議なもので、同じ母校を持つ同期生ならではの感じました。さほど外見が変わった人はいなかったと思いましたが、恒例の入学願書(学生証)の写真的の前での近況紹介が始まると、みんな15年以上前と今とは随分様子が違うもので、一人ずつ写真が出るたびに本人の悲鳴や周りの歓声がわき起こって盛り上がりました。おしゃべり好きの仲良しが同じテーブルに集



NY ベスイスラエル病院

# アメリカの医療 ( 卒後教育 ) の長短所



関根龍一 ( 医、17 期生 )

皆様お元気でお過ごしですか。私は2001年よりNYのAlbert Einstein College of MedicineのマンハッタンキャンパスであるBeth Israel Medical Centerにて内科レジデント研修を始め、3年間の内科研修を今年無事終了し米国内科認定医となりました。現在は同病院でPain Medicine and Palliative CareのClinical Fellowをしています。私は実家が寺であることもあり、医学部入学時から将来は終末期医療に関わりたいたと思っていました。

今年7月より長年の希望が叶い、疼痛緩和医療のフェローシップ研修を受けられることになり、充実した毎日をお過ごししています。対象患者は癌の末期患者のみならず、癌ではないが慢性疼痛に苦しんでいる患者群で、身体的、精神的、社会的、時には霊的(スピリチュアル)の多方面アプローチの要する非常に困難な患者が当科には集まっています。プログラムのchairmanであるDr. Russell Portenoyはchronic pain & symptom managementでの第一人者で同フェローシップは彼によって全米に先駆けて1997年にpain managementとpalliative medicineを合わせたユニークなものとして作られました。

各フェローのレジデント研修領域はさまざま、麻酔科、リハビリテーション科、家庭医療科、内科、小児科と多様なメンバーが揃いそれぞれ切磋琢磨しあって臨床研修をしております。ウェブサイトwww.stoppain.orgに詳しい研修内容が紹介されています。アメリカで臨床をしてい

ると日本とアメリカの医療の違いにはつきり気付きます。以下アメリカでの医療(卒後教育)の長所短所を列挙しました。あくまで限られた個人的経験からですのでその点ご容赦下さい。

アメリカでの医療、レジデント教育(内科)の長所

1. 教育スタッフが一般に充実、competent clinicianを養成するという意識が浸透している。プログラムにもよるが、学生、インターン、レジデントが1チームとなり互いに教育し合うシステムになっている。
2. 卒後トレーニングについて達成項目が事細かく明文化され、質の維持が保たれている。
3. Evidence-based Medicineに基づく医療が常識化しており、医療の標準化も進んでいる。病院評価機構であるJCAHOが定期的に病院を、卒後教育評価機関としてのACGMEが卒後研修プログラムを監督している。評価結果は公表され標準に満たない病院、研修プログラムは相応の制裁をうけることになるため、医療現場の、研修プログラムの質の維持、向上に真剣である。
4. アメリカの色々な社会的要因により患者の権利についての意識が高く、患者中心の医療が浸透している。
5. 各部門の専門医制度が充実しており、最先端の高度医療が提供されている。

アメリカの医療の短所

1. 医療の縦割り化、専門医制度の弊害として、各科のコミュニケーション不足がよくみられる。
2. 医療費が非常に高額である。
3. 医療保険制度が非常に複雑で事務処理も非常に大変。貧富の差の激しい社会であり、4000万人?が医療保険に加入していない。
4. 医療がビジネス化しており、保険会社が実際の医療決定を支配している傾向をうける。
5. 訴訟が多くdefensive medicineによって過剰な文書記載、検査が行われる。

各レジデンシーの外国人枠は限られていますが、周到的な準備をすれば特に内科系であれば臨床留学するチャンスは十分あります。帰国子女でない日本人がアメリカのレジデント研修に入る準備はそれなりに大変ですが、それに見合うだけの質の高い臨床研修も得られます。また医療現場の外でも異なる文化、社会、宗教を背景にもつ人たちのふれあいを通じての貴重な経験が得られることと私は自分の経験を通してそう思います。アメリカの内科レジデンシーに興味のある方がおられたら研修内容や準備方法についてお伝えできますので気軽にご連絡ください。

E-mail: ryuichis45@hotmail.com

末筆ながら母校滋賀医大の益々の発展を心より祈念しております。

\* 第46号に幹事会の報告として総会の資料を掲載していますが、それに基づいて報告します

1. 2003年度事業報告(2003.9.1～2004.8.31)は資料通り承認された
2. 2004年度事業計画(2004.9.1～2005.8.31)は資料通り承認された  
特に  
・新たに「藤原よしみ奨学金」を設け、海外自主研修を希望する学生をサポートする。詳細は幹事会で検討し決定する。
3. 2003年度決算報告は資料通り承認された
4. 2004年度予算は資料通り承認された
5. 各担当幹事から報告があった
6. その他
  - 1) 看護学科卒業生より保健師メーリングリスト立上げの希望があり、承認された
  - 2) 常任幹事のメンバーの見直しを行う
  - 3) 会員同士の就職情報を集約し提供するようにしてはどうか
  - 4) 来年度から総会の後に懇親会を設けて出席者を増やすようにしてはどうか

詳しくは、ホームページをご覧ください <http://www.koikai.org>

## 議事録 第40回幹事会 兼 2004年度第1回常任幹事会議事録から(2005.2.9)

- (1)「藤原よしみ奨学金」の要項等を検討・・・人数は若干名とし、金額は総額¥300,000。対象者についてはもう少し検討することになった。
- (2)会員用メーリングリストを立ち上げるようになった。  
\*別紙にて入会を案内していますのでご覧ください
- (3)保育施設の設立に向けて湖医会が呼びかけ、湖医会・大学・滋賀医大生協の三者が話し合い、具体化していく事が確認された。
- (4)一般visaカードからの会費引落について、現在希望者が70名足らず。この人数でも可能かどうか問い合わせ中。
- (5)病院の『医師募集』を、広告として湖都通信に掲載可能とすることが決まった。  
卒業生が関わる病院の医師募集記事とは区別する。
- (6)勢多だよりの配付について・・・今回は03年度と04年度会費完納者に送付する。今後は「送らないでほしい人」を調査し、その人には送付しない。前号で実施した『勢多だより配付アンケート』の結果は次の通り。(今回総会委任状はがきの裏面でアンケートを実施したが、総会の出欠をはがきではなくメールで連絡する人が多かった)

有効回答数は、74名	1、大学の発行物は	(人)	2、今後『勢多だより』は	(人)
	a. よく読む・・・	61	a. ほしい・・・	58
	b. あまり読まない・・・	12	b. いらぬ・・・	5
	c. 全然読まない・・・	1	c. どちらでもよい・・・	10

## 2004年、保健師会に参加して 事例検討会の大切さを改めて感じました

魚津市健康センター  
亀田諭可 (看、3期生)



滋賀医大看護学科の卒業生で保健師として働く仲間たちが年に一度集まる、恒例の『保健師会』が2004年12月11日(土)に開催され、たくさんの仲間や先生方が参加されました。

今回は、毎年行っている交流会に加え、事例検討会を初めて行いました。高城会長(1期生)から実際に関わった事例を提供していただき、先輩がどのように悩み、どう活動されたのか、またそれによって家族関係がどのように変化していったのかなどをお聞きしました。残念ながら予定よりも時間が短く、じっくりと事例を検討するまでには至りませんでした。グループワークでは「自分だったらどう行動していたか」「今回の事例でうまくいった点」など意見を話し合ったり、先生から助言をいただいたりと、貴重な学びを得ました。参加

者の中には事例検討会をあまり経験したことがないという方も少なくなく、検討会を行う大切さを改めて感じられたのではないかと思います。この事例検討会が今後も継続されていくことを望みます。

瀬田駅前のホテルに移動し、おいしい料理と大量のアルコール(?)で口も滑らかになった交流会。皆さんの近況をお聞きしたり、仕事での悩みを相談したりと、あっという間に時間が流れていきました。先輩や後輩の日頃のがんばりを聞き、また新たな気持ちでがんばろうと思える貴重な機会となりました。次回もまた、皆さんにお会いできるのを楽しみにしています。

### 保健師会メーリングリスト

・・・詳しくは事務局にお問い合わせください

2005年1月に立ち上げました!

アドレスは [hokensi@sl.sakura.ne.jp](mailto:hokensi@sl.sakura.ne.jp)



# 助教授紹介

今井晋二 (医9期生) 滋賀医大リハビリテーション部 助教授



1989年3月 滋賀医科大学医学部医学科卒業  
 1989年6月 滋賀医科大学医学部附属病院医員(研修医)  
 1990年4月 滋賀医科大学大学院医学研究科博士課程入学  
 1994年3月 同 修了  
 1994年4月 医療法人誠光会草津中央病院整形外科医師  
 1996年1月 滋賀医科大学医学部助手  
 1998年4月 医療法人竜王会小澤病院整形外科部長  
 1998年11月 日本学術振興会特別研究員  
 2001年7月 滋賀医科大学医学部附属病院助手  
 2004年11月 同 リハビリテーション部助教授

2004年11月1日よりリハビリテーション部の助教授を拝命いたしました。骨粗鬆性脊椎疾患および末梢神経疾患を専門領域の対象としておりますが、広く筋・骨格系疾患に精通したいところがございます。教育・研究・診療という医科大学人の本分を忘れることなく微力ながら精進していく所存であります。今後ともよろしくお願いたします。

西村栄美 (医14期生) 北海道大学創成科学研究機構 移植医療・組織工学プロジェクト 助教授



1994年3月 滋賀医科大学医学部医学科卒業  
 1994年4月 京都大学医学部皮膚科入局  
 1995年4月 倉敷中央病院皮膚科勤務  
 1996年4月 京都大学大学院医学研究科大学院生  
 2000年3月 同上終了  
 2000年4月 京都大学大学院医学研究科皮膚科研究員  
 2000年5月 京都大学医学部附属病院医員  
 2000年8月 ハーバード大学医学部ダナファーバー癌研究所留学  
 2003年10月 同上 インストラクター  
 2004年9月 北海道大学創成科学研究機構 移植医療・組織工学プロジェクト助教授、北海道大学医学研究科皮膚科非常勤講師兼任

皮膚の再生医療に向けて、色素細胞の発生研究から始め、過去5年間は、色素幹細胞の同定、そして白髪メカニズムの解明を行ってきました。サイエンスを楽しみつつも気苦労しているうちに、自らの白髪化も潜在性に行進していることを感じています。現在は、幹細胞の維持機構、そして幹細胞の老化や癌化をテーマに再生医療の現実化に向けて研究を進めています。ポスドク留学を経て、このたび着任しましたポストは時限つきですので、当紹介欄に不相応と恐縮しておりますが、お世話になった先生方への帰国のご挨拶に変えさせて頂きたいと思っております。北の国から母校の発展をお祈り致しております。

住所・勤務先肩書き等に変更がありましたら事務局にご一報ください

## 湖医会奨学金、ご寄付者一覧

ありがとうございました。心よりお礼申し上げます  
 (2004.9.21 ~ 2005.2.25 順不同、敬称略)

医学科4期生有志  
 看護学科3期生有志



<特別会員>

北里 宏 原納 優

<正会員>

松川誠司(医4) 赤澤千春(看院卒)  
 小山恒男(医5) 猪木 健(医12)

## 医師募集

社会保険滋賀病院

健康管理センターで医師を募集しています

健診医師を募集しています。  
 常勤・非常勤のいずれもOK。専門性は問いません。健診バスに乗ってくれる医師は大歓迎です。  
 ご連絡をお待ちしています。



社会保険滋賀病院健診部長 中島滋美(医、2期生)

<連絡先> TEL: 077-537-3101  
 E-mail: shigemin@rainbow.plala.or.jp

横田敏勝先生(本会特別会員、滋賀医大名誉教授)が、2月14日ご逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

# 訃報

木村敬孝先生、ありがとうございました!

ベタニヤ内科・神経内科クリニック(院長)

渡辺佳夫(医、5期生)

脳出血のため昨年11月22日永眠。享年55歳。訃報に接し、木村先生の最後の言葉を思い出しました。「いつかまた会いたいね」と私が電話で言うと、英語に堪能な彼は「One of these days is none of these days」(いつかまたという日はない)。残された日々の少ないことを、彼自身が最も感じておられたのでしよう。この社会で私達は、臨機応変に価値基準を使い分けませんが、彼はそんな御都合主義を嫌いました。強者の論理を批判し、純粹に理想を求めました。勤務先の病院に患者さん本位の精神が希薄だと指摘し、3つの病院で管理職と対立して辞めました。「保身でなく患者さん第一」と会うたびに聞かされました。「なんのために医師になったのか?本来すべきことは?」としばしば問いかけ、身をもって示してくださいました。そんな木村敬孝先生を友人に持てたことを、心より感謝しています。合掌。

木村先生を偲んで

横浜宮崎脳神経外科病院 天野泰嗣(医、5期生)

お互いの留年中、一緒に教会へ行ったこと、喫茶店にたむろして何時間もお喋りしていたことがいい思い出となっています。卒業後はしばらく交流が途絶えていましたが、ここ数年は私から時々電話して色々とお話ののちもらっていました。木村さんの専門である産科のことはむろんのこと、女性について、映画、音楽など様々な話題について、教えられることが多かったように思われます。入学と卒業は同期でありましたが、私にとっては、いつも先輩である木村さんでした。最近連絡しようと思っていた矢先の訃報でした。木村さん色々相談のつてくれてありがとうございました。又会うときは、私が一度相談したかったことで話せなかつた事の相談相手になってください。人を傷つけることがほとんど無かつた木村さん、今は安らかに眠ってください。

ご協賛  
ありがとうございます

株式会社 三和化学研究所 / 日本ケミファ株式会社 / 扶桑薬品工業株式会社  
 日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社 / セリア新薬工業株式会社(順不同)